薬の歴史 ——その使用価値の考察[1]——

安江政一

一　はじめに

薬の歴史については、すでにいくつかの単行本[2]が出版され、今さら追加することはないと思われるが、薬が流通する過程で示す特殊性を解明するものはないので、この点を補いたいと考える。薬の定義は日本薬局方、宮木の著書[3]などに述べられているが、それは現代の薬であって、古代にまでさかのぼって歴史を考えようとする場合、その定義は拘束になりかねない。辰野らが指摘するように、薬は商品であるから交換価値をもっている。[4]しかし、交換価値は商品の具体的性格を捨象して貨幣に換算した数値であるから、薬の本質ともいうべき「ききめ」とは無関係である。それ故、交換価値から薬の特殊性を引出すことは困難で、むしろ使用価値「ききめ」に注目すべきであろう。物の「具体的な使用価値は人類の各発展段階に対応している[5]」から、薬についてもその使用価値を考察するには、それぞれの時代においてどのように用いられたかを調べて、その変化をたどらなくてはならない。そこで古代から今日に至るまでの医学史、薬学史の中から、薬の使い方と期待された効果を拾い出して考察する。

二　薬の起原

薬の起原はきわめて古く、人類とともにあったといわれる。古代においては政治と宗教と医療は分化せず、豊作とともも

に無病息災や健康の回復を祈ったであろう。この祭のときの供物と薬の関係はわからないが、古代アルケミーの起原は薬物と健康と長生に関連して、宗教と薬は密着していた。(6) わが国最古の医療記録といわれる『古事記』の因幡の白兎と大国主命の物語(7)では、皮をはぎとられた白兎は蒲の穂綿で、真赤に焼けた大石の下敷になって焼死した大国主命は、貝殻の粉末と乳汁による軟膏で、即座に元通りの体に回復した。このときの薬は神通力の媒体であって、「生理作用をもつ物質」などという観念はないのである。(8)

時代が下って、病気は天災などと同様に悪霊の仕業と考えるようになると、祈禱が治療の主役となるが、この頃の祈禱は政治と分化して宗教専門家のすることとなっている。さらに悪霊だけでなく、狐などの動物が人について病気をおこすと考えるようになると、食を求める経験で知られていた毒物を使うようになった。人体についている動物を、毒によって追い出そうとするもので、薬は重篤な症状をおこしてこそきくという考え方を生じた。(9) そこで良薬は口に苦く、百草をなめて薬効を知ることが行われた。

また天然物の形が薬を探す目安にされたこともあって、人体の形に似た朝鮮人参とマンドラゴラ(10)の根が全身に有効な薬として珍重され、人参は現在も東アジア地域で用いられている。このような流れの中でホメオパシー(11)がドイツでおこった。現在でもドイツではドラギストが薬局と共存して生薬類を販売している。近代科学発祥の地、西欧においても、いまだに薬草による療法の書(12)の出版を見るのは、医学の発達とは関係なく、薬の「ききめ」における神秘性がぬぐえない証拠といえよう。

三　中世の薬と感応療法

人知の発達は、理論を不当におしすすめて空想を展開する。極端な薬の使用法として武器軟膏(13)が作られた。刀傷治療に際して、その傷と刀を清潔にして、薬は傷にではなく刀に塗るというものである。この発想は奇想天外のようであるが、

類似の現象は身辺にもある。子供がつまずいてころんだとき、そのつまずいた物をたたいて子供をあやすのである。悪いことの原因になった物を罰して痛みを止めるという発想である。また子供の歯痛を止めるため、痛む歯で古い竹串を軽くかみ、痛みを竹串に托して、祠に平癒を祈るまじないであるが、いずれも物を介在させる遠隔治療であるところに、感応療法と一脈相通ずるものがある。

四　動物磁気説[14]　――暗示による治療――

スイス生れの医学者メスメルは、ガルバーニによって発見された電気による筋肉の収縮と、成立したばかりの磁気論を結びつけて思弁的な体系を作りあげ、惑星の運行が人体に及ぼす影響を論じた。この天体間の磁気作用は、宇宙に充満する不可知の流体に媒介されて相互に影響しあっているから、その干満を巧に利用すれば病気をなおすことができる。この磁気は精神の集中によって集められ、施術者メスメルの目から流出して患者に伝達できると説いた。この流出する「気」が動物磁気である。この治療法は熱狂的な信者を獲得する一方、医学者たちの激しい攻撃をうけ、パリ科学アカデミーはこれを調査する委員会を組織した。結果はメスメルに否定的となったが、施術は治癒をもたらす場合のあることを付言した。暗示の治療効果、プラセボの公的な証明の最初であろう。

五　現代の薬　――医療効果の物質的な担い手――

以上述べたように、薬の根源は神だのみに始まり、自然物の中から求めるようになっても動物磁気説にみられるように、精神的作用に基づくプラセボ効果が大きく関与してきた。このような、医療に及ぼす精神的な作用も科学的研究の対象として、心療内科[15]の基礎的研究によって、精神作用が生理現象に及ぼす影響が、具体的に明らかにされた。そして薬効の判定は、病院における二重盲検法の採用によってプラセボ効果は排除できるようになった。現代の治療薬は医療効果の

物質的な担体になったといえる。

薬について、その発生から今日に至るまでの経過をざっとみたが、薬にはたえず心の動きにかかわる神秘的なものがつきまとっていた。現代においては、精神的なものと生理作用との関係も科学的な実験の方法によって検証できるようになっているが、医療の実際面では今も昔も変っていない。それればかりではなく薬の進歩は、ときには使用価値が命に代える程重要な場合があって、無限大にさえなるようになった。それでも交換価値はその生産に支出される社会的な労働の量によって規定され、使用価値とは本来無関係である。にも拘らず命との交換のように誤解されがちになるのである。

六　薬の特殊性　――使用価値の隠蔽性――

いま医療の効果をCで表わし、これをいくつかの要素に分けて考えてみる。まず人間が生物として本来もっている回復する力、自然治癒力をAとする。次に人間だけがもつ精神作用が、肉体に及ぼす影響によるプラセボ効果をPとする。実際の薬効をEとし、その薬に伴う好ましくない副作用をSとすれば、医療効果Cは次の関係式で表わすことができる。

$$C = A + P + E - S$$

前に述べたように、薬の効果の判定には二重盲検法が用いられ、Pは排除されているが、それは研究段階のことであって、薬として発売するときの許認可には関係するが、実際の医療面では昔と同様効果の中に入ったままである。薬の使用価値は本来Eであるのに、一般の医療の場ではCとしてうけとられる。そのCの中にはAとPが含まれ、それが主要部分を占めている場合でも、APEを区別して認識することはできない。このように薬の真の使用価値は隠蔽されてわからないのである。

薬は科学的研究の成果として生産されるが、科学の法則にもいろいろある。力学の法則のように一対一の因果関係で成立するものと、放射性壊変法則のように確率に支配されるものとがある。生物に関する法則、特に医療に関する場合の法

則は後者に属し、統計的に成立するものである。それ故個別的には成立せず、逆になることも珍しくない。一例でもって断定することは全くできないのである。この面からも薬の使用価値は隠蔽され、無効とわかっていても容易に排除できないことが起こる。薬についての諸問題は使用価値の隠蔽によって複雑、あいまいで決定困難になっているのである。

文献

(1) 第八十五回日本医史学会総会にて発表（名古屋一九八四）。
(2) 『くすりの歴史』、岡崎寛蔵、講談社（一九七六）、『くすりの歴史』、石坂哲夫、日本評論社（一九七九）。
(3) 宮木高明『薬学概論』一三、広川書店（一九七六第七版）。
(4) 辰野高司『日本の薬学』一二、紀伊国屋書店（一九六六）、辰野高司、川瀬清、高野哲夫『薬学概論』三、南江堂（一九八三）。
(5) 宮川実編経済学講座『資本主義の基本法則』第一巻、三八、青木書店（一九五二）。
(6) 佐藤任『密教と錬金術』、経草書房（一九八三）。
(7) 倉野憲司校注『古事記』四四、四五、原文二二六、二二七、岩波文庫（一九六四）、益田勝実『古事記』六七、岩波書店（一九八四）。
(8) 安江政一、薬史学雑誌、十二巻一号（一九七七）。
(9) 宗田一「日本の医療文化史」、ノイエ・インフォルマ、二八（一九七九年一号）。
(10) ノーマン・テーラー著、難波恒雄、難波洋子訳『世界を変えた薬用植物』一九二、創元社（一九七二）。
(11) 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』下五九四、岩波書店（一九七七）。
(12) モーリス・メッセゲ著、田中孝治、高山林太郎訳『メッセゲ氏の薬草療法』、自然の友社（一九八〇）、マダウス著、山岸晃、長沢元夫訳『ドイツの植物療法』、日本古医学資料センター。
(13) ラウォール著、日野巌、久保寺十四夫訳『世界薬学史』一五四、一八二、科学書院（一九八一復刻）。
(14) マイヤー・シュタイネック、ズートホフ著、酒井シヅ、三浦尤三訳『図説医学史』二七三、朝倉書店（一九八二）。
(15) 池見酉次郎『心療内科』、中央公論社（一九八三第五二版）。

（新潟薬科大学）

History of Remedies

—Investigation into their real values in use—

by

Masaichi YASUE

The real value of drugs in use is based on their actual effectiveness against disease. The total effects of medical treatment C is composed of the natural recovering ability A, the placebo effect P, the real effects of drugs E and undesirable side effects S and expressed as following,

$$C = A + P + E - S$$

In the practice of medical treatment, A, P, E appear together and each of them can not be measured separately, so that the effect of drugs remains obscure. In this article I should like to describe a few examples about the real effects of drugs hidden in the history of remedies.